渡辺金一著
『コンスタンティノープル千年—革命劇場』

本書は、日本におけるビザンツ史研究の第一人者渡辺金一氏が、一般読者向けに、氏が長年考えてきたビザンツ像を描いた野心作である。その中心課題は、氏自身まえがきで述べているように、「無定形の群衆、だが実は一つの集団意識をそなえた市民」と「そのかれらを相手にしながら繰り返し対応を迫られる皇帝」とを類型的に理解し、コンスタンティノープルを首都とした一千年余りの期間にこの二つの類型が主として政治面についてどのような意識を持ち、かつ行動していたかを考察することである。周知のごとく、前著『中世ローマ帝国』(岩波新書一九八〇年)で語られた氏独自のビザンツ理解、すなわちローマ帝国からビザンツ帝国への移行を連続的に捉える姿勢が、本書でも大前提になっている。また、新書版という性格上触れられていないが、本書が、特に、ミュンヘン・ビザンツ学の碩学、ハンス=ゲオルグ・ベック Hans-Georg Beck の膨大な研究成果を消化して成り立っていることも、見逃すことはできない。

以下、本書の内容を、章ごとに紹介する。

プロローグ『スキャンダルのある社会』では、ビザンツの経済形態を国家による再分配システムであると指摘し、「スキャンダル τὸ σκάνδαλον」の発生源も常に国家権力と結びついたところにあったと述べる。

第一章『憲法感覚』では、ビザンツ人の国家意識において、国家と皇帝が明確に区別されていたと指摘する。そういう訳で、専制君主政に対する政体変革の試みが一度もなされなかったのに、皇帝の約半数がクーデターで失脚するというビザンツ独特の事態が起こったのである。さらに、元首政期以来の皇帝選挙原理、すなわち、元老院・市民・軍隊による選挙という形態が無視され得なかったことを述べる。こうしたビザンツ人の政治意識を氏は憲法感覚と呼ぶのである。

第二章『大都会のなかの帝王』では、ビザンツ初期における皇帝選挙原理の変遷を論じている。いわゆるディオクレティアヌス=コンスタンティヌス体制成立後も、三世紀以来の軍人による皇帝選挙という形態は、かなりの間続く。が、五世紀後半以降は、元老院・市民・軍隊の三要素の参加が不可避となり、元首政期の選挙原理に戻ったと説く。但し、ビザンツの独自性を、コンスタンティノープルの「第二のローマ」としての発展と、その市民の首都市民としての自覚が背景となっている点に見ている。

第三章『サーカス対話』では、ヒポドローム(競馬場)という、皇帝が市民と直接向かい合う場での《サーカス対話》の記録から、首都市民の政治意識を明らかにしていく。

第四章『後継者指名のスタイル』では、共同皇帝指名による平和的な皇位継承が行われた時に、皇帝選挙原理がビザンツ帝国末期まで手続きとして機能していたことを例証する。

第五章『儀式としての革命』では、クーデターによる暴力的な皇帝位簒奪が行われた時の選挙原理の機能の仕方を見る。ここでは、元老院と市民の役割を積極的に評価する。その際の市民の冷静な対応を、クーデターが「皇帝廃位宣言」と「新皇帝祝賀」という二つの過程を必ず伴う、かの選挙原

理が明確に働いた「儀式としての革命」として、ビザンツ人の憲法感覚に定着していたからと考える。

第六章『社会的流動性』では、ビザンツの社会構造を、ヨコ同志のつながりはほとんど見られず、上層部の個々のメンバーがそれぞれ中・下層民とつながりを持つタテ社会と規定する。この仕組の中で、社会的上昇が皇帝位に至るまで開かれることになり、ビザンツの社会的流動性は著しく大きいと考えられるのである。

エピローグ『市民の向背』では、首都市民の反対でクーデターの失敗した例を挙げ、再度、市民の役割を強調したところで、本書を締めくくっている。

以上のように、本書は、ビザンツ人の意識（氏はこれを憲法感覚と言う）を、元首政の伝統の存続の中に見出そうとする方向で書かれている。使用された史料が、皇位継承に関するものに片寄っているのも、こうした問題関心からと思われる。その内容は、コンスタンティノープルの住民に限られるとはいえ、ビザンツ人のメンタリティーの重要な一面を表していることに疑いはない。

しかし、読者は、こうしたアプローチとは別に、ローマの影をぬぐい去ったところにビザンツの心性を見つけようとする研究が進められていることも忘れてはならない。結局、ビザンツは、ローマの伝統を引きずりながら、ローマに含まれ得ない一つの文明を形成したのであり、この二重性にビザンツの特異性があるからである。

いずれにしても、本書は、千年にもわたるビザンツ帝国の皇帝と市民の関係を、わかりやすく、鮮やかに描き出した好著である。

（新書版　二二七頁　一九八五年六月
岩波書店　四三〇円）
（中嶋薫　京都大学大学院生）

飯島武次著
『夏殷文化の考古学研究』

中国考古学において近年にわかに注目をあつめているのが、中国文明の起源、とりわけ夏王朝の実在をめぐっての問題であろう。前世紀末の甲骨文の発見と一九二八年にはじまる安陽殷墟の発掘調査によって、零細な文献記録しかない殷王朝の存在が実証された。そして各地で考古学的調査が飛躍的に拡大しつつある今日、殷王朝にさかのぼる伝説上の夏王朝の存在を考古学的に実証しようとする精力的な研究が、中国の研究者によってすすめられている。ところが我国においては、この問題に対する活発な論議がおこなわれているとは言いがたい。中国考古学を専攻する研究者が少ないことに加えて、我々外国人が入手できる資料に限りがあり、実際に発掘に従事している中国の研究者に比べて制約が大きいからである。こうした状況の下で、中国から発表されるデータを再整理して、夏の問題、ひいては国家の起源の問題に真正面から取組もうとしたのが本書であり、その野心的な姿勢にまずは敬意を表したい。

本書は筆者が一九七七年より一九八三年までの間に雑誌『古代文化』に「殷前期の提言」と題して発表した十六篇を、その後の知見を加筆した上で収録したものである。黄河中流域における河南龍山文化、二里頭文化、二里岡文化という連続する文化の中で特に二里頭文化に焦点をあて、随所に自説を盛りこみながら、さまざまな角度からその文化の内容を詳しく解説している。全体は九章からなり、遺跡、遺構、遺物の順